訃報

本学名誉教授（元機械工学科教授、元電気通信大学長、東京工芸大学名誉教授、元東京工芸大学長）田中榮先生（本学在職：昭和36年12月～昭和63年4月）（享年91）には、心不全のため5月1日（木）に御逝去されました。ここに謹んでお知らせいたします。なお，5月5日（月）に家族葬が、5月10日（土）に本葬儀が執り行われました。

田中榮先生のご永眠について

通機会会長　**長竹　和夫**（1975年卒）

本葬儀は、5月10日（土）13時から、世田谷区砧の東京メモリードホールで行われました。故人を偲び、本学から梶谷学長を始め、名誉教授、事務職員、機械科の現役教員および元教員の先生方など約150名ほどの方々が参列しました。参列者着席の後、僧侶が入場され、開式の言葉に続き、読経、弔辞の拝読、弔電の奉読が行われました。弔辞は、電気通信大学と東京工芸大学の代表の方より朗読がありました。

本学からの弔辞は、通信機械工学科1期生でもある電気通信大学長　梶谷誠先生が朗読され、その中で、田中榮先生が、学問に対する情熱、学生に対する接し方から、もっとも学者らしい学者という雰囲気を漂わせておられたこと、厳しさと人情味を併せ持ち、若い者を褒め、元気を与える名人でもあったことなど、色々なエピソードをご紹介されました。また、機械科で博士号を取得した方々を毎年表彰している田中榮賞創設の経緯を述べられ、改めて感謝の言葉を語られました。弔辞の拝受の後、再び読経となり、ご焼香をし、最後のお別れをいたしました。引続き催された精進落としの宴席では、多くの懐かしい先生方と久しぶりにお会いすることができ、田中榮先生を偲んで沢山のお話を伺うことができました。

ここで、この紙面を借りて田中榮先生の略歴についてご紹介致します。田中榮先生は、昭和14年3月に東北帝国大学（現在の東北大学）の理学部を卒業後、昭和16年9月に東北帝国大学副手、昭和20年3月に東北帝国大学助教授、昭和22年10月に東北大学助教授、昭和29年12月に東北大学教授になられました。電気通信大学へは、昭和36年12月に知能機械工学科の前身である通信機械工学科に教授として着任され、通信機械工学科の礎を築かれました。その後、附属図書館長、附属電気通信研究施設長を歴任された後、昭和57年5月に電気通信大学長に就任されました。学長の任期中に博士課程の設置にご尽力され、昭和62年10月に博士課程が電気通信大学に設置されました。昭和63年4月に学長を退任されましたが、昭和63年11月に勲二等旭日重光章を受章されました。その後、平成2年10月から平成8年3月まで東京工芸大学長を務められました。また、田中榮賞創設の経緯ですが、先ほど述べました勲二等旭日重光章の受章をお祝いする記念式典を開催した際、お祝いの記念品を贈呈しようとしましたが、田中榮先生はそれを頑として固辞され、その醵金をそのまま通機会に寄付してくださいました。このご寄付を基金とする田中榮賞を設け、機械科で博士号を取得した方々を毎年表彰することになりました。2007年度までの田中榮賞の受賞者は95人になります。

最後となりましたが、田中榮先生に対し、ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、冥福をお祈りいたします。

田中榮先生の思い出

石川島プラント建設　**坂田　芳幸**（1969年卒）

田中先生には卒業研究のため研究室に入らせていただいた時から親しくご指導をいただいてまい

りました。特に修士修了までの論文指導においては、実験や海外文献調査の大切さを厳しくたたきこまれたことは鮮明な思い出です。また、当時から電通大を日本一の単科大学にするという夢を常に語っておられ、我々を鼓舞されるとともに、その後も本学の責任者としてご尽力されて、先生の夢の一端はかなえられたのではないかと思います。

卒業後もたまに研究室にお邪魔すると、いきなり卒論生などを集められて、何の準備もしてないしかも会社では末端の設計担当者である私如きに、原子力機器の設計技術の話をせよと求められることもあったり、企業や産業の動向を熱心に質問されることもしばしばでした。このような経験をなさった方は多数おられるのではないかと思いますが、これも先生は産業界で卒業生が少しでも活躍することを喜ばれつつ、日本の産業や技術の動きに強い関心と期待を持ちつづけられた証だと思います。先生が老境に入られてからも、このような話題を投げかけられ、そのたびに元気をいただくことができました。

先生はご自身についても前向きでベストを求められており、バイオリンやゴルフについて熱く語られておられたことも懐かしい思い出です。昨年末に電話でお話した際にも、動作が若干不自由になられた様子を悔しがりながらも、身体はどこも悪くないと前向きにおっしゃっておられたにもかかわらず、急逝されたのは残念でなりません。まさに昭和のダンディズムを貫かれたご一生であったかと思います。心よりご冥福をお祈りいたします。

田中榮先生を偲んで

滋賀県立大学工学部教授　**高松　徹**（1974 年卒）

私は、1970 年機械工学科に入学、1976 年機械工学専攻を修了しました。その間、田中先生から卒業論文、修士論文のご指導を受けました。私の専門は材料強度学ですが、いただいた修論のテーマは、私の学位論文（1991 年、田中榮賞 4 号）の端緒となるものでした。大学院修了後企業に就職しようとしましたが、先生に相談したところ、助手のポストがあいているので、しばらく研究室に残ったらというお誘いを受けました。先生が本学の学長になられてからも、私の電通大在職中は研究室においでになって、叱咤激励していただきました。1999 年に滋賀県立大学に移るときは、「滋賀県はいい所だよ」、という先生のお言葉で決めた、といっても過言ではありません。私どもの結婚式の仲人をお引き受けいただいたこともあり、毎年心ばかりのものを先生にお送りしていましたが、先生は届いたその日の夜に、お元気な声で「高松君、帰っている」と電話をかけて下さり、食された感想を述べられた後、滋賀県に移ってからは、電通大の近況を聞かせて下さいました。その先生との電話での会話も 3 年ほど前の夏が最後でした。

先生は、材料力学の授業でティモシェンコ「Elements of Strength of Materials」の原著を教科書として使用されたために、私は大変苦労しました。先生は、他の教科書のほとんどはそれを参考にしていること、平易な英語なので、それを手本にすれば学生の技術英語の勉強になること、を選んだ理由だとおっしゃっていました。現在、私は材料力学の授業を担当しており、ティモシェンコを読み直すことがあります。そのたびに、先生の教えが正しかったことを痛感しています。

また先生のクラシック好きは有名で、確かご自分でもバイオリンを演奏されたと記憶しています。私がとくに印象に残っているのは、1971 年東京芝公園の郵便貯金ホールでの電通大オケの定演のことです。共演のバイオリニスト前橋汀子さんの演奏はすばらしく、先生はわざわざ一番前の席に移動され聞き入っておられたお姿を、いまでも鮮明に覚えています。

なんとかこれまで大学に勤められたのは、先生のお教えのおかげだと思っております。先生との思い出は沢山あって書き尽くせません。今はただ先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。